

オジいサン◎目次

七十二年六箇月と一日	午前五時四十七分～六時三十五分	5
七十二年六箇月と二日	午前十時二十六分～五十三分	55
七十二年六箇月と三日	午前九時五十分～十時四十二分	107
七十二年六箇月と四日	午後四時三十八分～五時十六分	159
七十二年六箇月と五日	午前十一時二分～午後〇時二十七分	211
七十二年六箇月と六日	午後一時十四分～四十五分	261
七十二年六箇月と七日	午後二時二分～五十八分	311

装画・挿絵 ヒロミチイト

装幀 山影麻奈

組版 京極夏彦

DTP 嵐下英治

オジいサン

七十二年六箇月と一日

午前五時四十七分〜六時三十五分



オジいサン——。
と、呼ばれた。

五月某日の早朝、寢床の中でのことである。

いや、実際に音として耳に聞こえた訳ではない。思い出しただけなのである。夢を見ていたのかもしれない。いや、そう呼ばれたこと自体が夢であつたということではなくて、そう呼ばれた記憶が睡眠中に夢として再生されていたのかもしれない、という意味である。

暑くも寒くもない。室内も、明るいようなまだ暗いようなという案配である。まあ、夜は終わっているのだから、起きるにはまだ早いのだ。きつと六時前である。いや、この頃はめきめき陽ひが長くなっているから、もつと早いのもかもしれない。

早く目覚めるとうんざりする。

どうにも長い。いや、一日はあつという間に終わる。一週間も一箇月も一年も、すぐに過ぎてしまう。それなのに、一時間が、一分が長い。呆あきれる程に長く思える。

妙なものである。

起床前の寢床の中は特に長い。ならばさっさと床を出れば良さそうなのだが、それが儘ならないところかもどかしいのである。億劫なのだ。つまり、頭の神経の方は覚醒していても身体の方が駄目だ、ということなのだろう。

——お爺さんだからか。

もう若くないことは間違いない。

いや、若くないどころではない。自分は既にいいだけ老人である。そんなことは疾うの昔に解っている。自覚だって十二分にある。七十を過ぎて猶、己は老人なんかではないなどと言ひ張る程に、自分は厚顔無恥ではないし、自信過剰でもない。

ないと思う。

思えば、己はたぶん五十を越した辺りで若振ることを諦めているのだ。若振るところか寧ろ老成することを望んだのではなかったか。いや、自分は確実にそう振る舞って来た。ちゃんと年寄りっぽく見えるように努力して来たのである。

その方が得だとか、楽だとかいうことではない。

世間と擦れる、その擦れ具合が己の衰えを告げた。それを素直に受け入れた——。

そんな感じだ。



電車で若い者に席を譲られたりすると、自分はそんな齡とじじゃないと言って怒る者がいると聞く。とんでもない話だと思ふ。實際の年齢はどうであらうと、そう見えたのであれば、見えたなりに振る舞うべきだらう。折角せつかくの親切を無にするようなことをしてはいけない。相手にも失礼だし、己の容貌に対しても失礼である。老けた外見には老けたなりの責任が伴うだらう。

益子徳一ましこ とういちは、そう思う。

そこで、徳一は寝返りを打った。

——それにしたって。

お爺さんなのかと思ふ。

まあ男性の老人は押し並なべてお爺さんなのだらう。そう考えれば自分は、正真正銘、紛まごう方かたなきお爺さんだらう。お爺さんであることは疑いようがない。見た目も中身も実年齢も何もかも、もう一致団結してお爺さんなのである。だから、そう呼ばれたところでどうこう言うことはなからう。

でも。

——あの発音は。

お爺さんじゃない。あれは、どう聴いたって。

——片假名表記だったよな。

徳一はそう思っているのである。何だってそんな風に思ったものか、実は徳一にも能く判らない。判らないのだけれど、少なくとも漢字ではないと思った。何故か漢字の字面はまったく浮かばなかったのだ。仮名である。それも、やっぱり片假名だろう。しかも——い、の部分に妙なアクセントが付けられているのである。

——そこは平仮名なのか。

文字に記せばオジイサン、である。

オジイサン——。

変な綴りだ。その辺りが、どうにも徳一には納得の行かないところなのだった。

枕が目につく。枕カバーなどというこじやれたものを使う習慣はない。徳一はもう、何十年も蕎麦殻の枕に手拭いを掛けて使っている。それが、黄ばんでいるように見えた。

光線の加減かもしれないかった。

汚れているのだろうか。整髪料などは付けない習慣だが、それだって脂は染み出るのである。いくら脂気の抜けた爺いであっても、そういうものは出るだろう。

いいや、老人の方が余計に分泌するのかもしれないと、徳一は思ったりする。

もう一度観る。



七十二年
六箇月と
一日

やはり黄ばんでいる気がする。

そもそもこの手拭いはいつ替えたのだったか。昨日は替えていないだろう。ならば一昨日か。いやいや、一昨日も替えていないのじゃないか。洗濯してから、既に数日は経過している筈だ。しかし枕カバーというものはそんなにすぐに黄ばむものなのだろうか。たった三日やそこいらでこんなになるものなのか。今までは、何日置きに替えていただろう。三日、いや一週間は替えないか。不潔だ。

一応綺麗好きな方だとは思っているのだが、それでも毎日取り換えたりはしない。そこまですでに帳面ではないのだ。いや、そうではないだろう。徳一は、几帳面は几帳面なのだ。決してズボラではない。若い頃から神経質な方だ。でも。

億劫なのだ。

——この辺が年寄りなのか。

そんなことを思う。

本来は我慢出来ないような事柄であっても、億劫だなと思った途端に何となくやり過ごせしてしまうケースが、最近多くなっているような気がする。億劫が勝つのだ。

——汚いなあ。

突如、自分がとても薄汚いものであるかのような想いに駆られる。

こんな黄ばんだ手拭いに頭を付けて寝ていたのか。

少し俯せ気味になって匂いを嗅いでみた。

世間には加齢臭なるものがあり、それは大層に不快なものであるという。七十を越しているのだからそうした臭いは当然漂い出ているのだろう。自覚がないというだけで、町の人々に不快な思いをさせているのかもしれない。それならまあ、

——オジいサンでも仕方がない。

そんな風に思ったのだ。

何度吸い込んでも能く判らなかつた。まあ、自分の匂いがするだけである。これが加齢臭だというのなら、もうどうしようもない。自分は加齢臭の塊である。もう一度、今度は鼻を押しつけるようにして嗅いだ。

結局、咽せた。

徳一は咳き込み、そのまま蹲るような姿勢で暫くごほごほと上体を揺らし続けた。気がつけば手を出して誰かに謝るような恰好になっている。

図らずも、これで心身共に完全に覚醒してしまったということになるだろう。ここ暫くの目覚めの中では最低の目覚めといえるだろう。

こうなってしまうと、もう眠れないだろう。



眠れないだろうけれども、それでも起き上がって活動するのは何故か嫌だった。

これは——年寄りだからではない。

こればかりは億劫とは少し違ふと思う。徳一は若い頃からこうだったのだ。

朝、覚醒後直ちに寢床から抜け出したくないという性向は、昨日今日に始まったものではないのである。

何をするにせよ、徳一はどうにも勿体をつける癖がある。何ごともサクサクと簡単に済ませてしまうことに抵抗があるのだと思う。さあ目覚めたぞ、今日もきちんと覚醒したぞ、先ずは何をどうしたのか、第一声は何と言おうか——と、まあそんなことをうだうだ考えたところで鯨の詰まりはいつも同じなのだし、結局特別なことなどは何ひとつしないのだけだ、それでも一応は、一日の開始に当たって心の準備などを入念に行うというのが徳一の常なのだ。目覚めてから床を出るまでの愚にもつかない葛藤は、半ば儀式のようなものなのである。

その性向に、最近は何億劫が加わる訳である。簡単に動き出したくない——に、簡単には動けない——が加わるという次第である。寢床で過ごす無為なる時間が、ぐだぐだと引き延ばされる所以である。

だから。

——まだまだ早い。

俯せになり、もう一度布団に潜もぐった。

少し大きく息を吸うと、また少し咽のどせた。

気管が細くなっているのだろう。それは、明らかに齡せいの所せい為いである。疲たも絡からむし、喉のども詰とまる。煙草タバコも吸われないのに結局はこうなるのだ。ならば禁煙などしなければ良かった。禁煙したのはもう二十年も前のことである。
つまり。

——オジいサンなのだ。

またそこに戻る。

余程よほどシヨックだったのだろうなと、徳一は他人ごとのように思う。思つてすぐに、徳一は自らの想いを打ち消した。

そんなことはない。

別に、それ程気にはいかなかった筈だ。

大体、そう呼ばれたのがいつのことだったかさえ、徳一は覚えていないのである。いずれ最近のことなのだろうが、まるで記憶にない。誰かにそう呼ばれたことだけは間違いないだろう。でも、果たしていつのことであつたのか。



七十二年
六箇月と
一日

昨日や一昨日ではないと思う。最低四日前、いや五日前だったか。

四日前は何をしたのだったか。それ以前に、何故三日前という選択肢が飛ばされたのだから。あれあれあれ——。

何か忘れている。

大事なことではないだろうけれど、何かが思い出せない。

まあ、今の徳一にとって、大事なことなどただのひとつもないのだけれど。

些細なことの積み重ねこそが徳一の人生そのものである。自おのが人生を軽く扱わないためには、些細なことこそを大切にせねばならぬだろう。ならば、忘れてしまっていいことなど徳一にはただのひとつもないことになる。

——何だろう。

そもそも、何ど処こで言われたのだったか。

身体を返して仰あおむ向けになる。

部屋はかなり明るくなっている。

カーテンごしの陽光が部屋をカーテン色に染めている。赤でも青でもない、煤すすけた生き成なりなのようなカーテンであるから、別段綺麗でも何でもない。味も素すっ気きもない、げんなりするような燻くすんだ景色である。

仰向けになると天井が見える。

この天井も、またどうにも評しようのない色合いなのだ。

元はこんな色ではなかったと思う。いいや、入居した時は新築だったから絶対にこんな色ではなかった。ナチュラルなとかというような、そんな名前の色だった。要するに天然樹木の色である。今はもう、紅茶で煮染めたような色だ。触ったことはないけれどザラザラだろう。畳は陽に晒せば色が抜けるけれども、木は逆に濃くなってしまふのだ。箆笥なんかも濃い色になっている。

——これじゃあ。

自分が齢をとるのも道理だと徳一は思う。

人間は年数が経つと畳のように色が抜けるのか、それとも木材のように濃くなるのだろうか。思うに、自分は濃くなったのではなからうか。シミや黒子も増えた。元々地黒ではあったのだが、瑞々しさがなくなった所為で燻みが出たのだろう。使い古して皺が寄るのはまあ自然の摂理なのだろうが、何よりあちこち硬くなったように思う。

天井がこれだけ黒ずむのだから、自分もいいだけお爺さんなのだろうさと、徳一は半ば強引に納得した。

そして、もう一度天井に見入る。



七十二年
七月と
一日

改めて観たことも畏^{かしこ}まって観たこともなかったが、改めようが改めまいが、畏まろうが畏まらなかりうが、見慣れた天井には違いはない。何が見慣れていると行って、先ずはこの木目だ。ここまで陽に焼けているというのに、木目は黒々と残っている。

木目の形は、まあ変わらないのだろう。

——そうそう。

寝床の真上の天井板の節目が、とても奇妙な形なのだ。何かの形に見えるのだけれど、何に見えるのかが一向に判らないのである。判らないまま、徳一はもう四十年からこの節目を見続けていることになる。寝る時は気にならないのだが、ふとした時に観てしまうものなのだ。

——何の形なのだろう。

何処かで見た。何かに似ているのだ。一度何処かの会社のシンボルマークではないかと思え立ち、確認してみたら全然違っていた。思い違いだったのだ。

——さて何だろう。

暫く忘^{ぼう}我の状態^がで節目を眺めていると、やがて頭の何処か端の方から、別の記憶が顔を覗かせた。

映らなくなりますよ——。

何だこのセリフは。何が映らなくなるんだ。

「ああ判った」

徳一は節目を見詰め乍ら声をあげた。

勿論誰も聞いてはいない。

独りなのだから声が漏れた、が正しい。

そして、判ったのはその奇妙な節目が何に見えるかということでは勿論ない。

そんな、何十年も判らなかつたものが突如として判ってしまうようなことはない。そういうことがあるとするならば——例えば風邪の鼻詰まりが一瞬にして開通してしまうが如き爽快なる快拳が度々訪れる人生ならば——きっと、毎日はずっと清々しくて愉しいものとなっていただろう。でも、それはないもの強請りなのだ。天啓などというものは、どんな時にも凡人には降りて来はしないものなのだ。

判ったのは。

そのセリフを発した人物が誰か、ということであった。

——電気屋だ。

それは、近所の田中電気のセリフだ。一昨年先代が脳卒中で死んで、冴えない感じの丸顔の二代目跡を継いでからサッパリ流行らなくなった、あの田中電気だ。



その田中電気の二代目がわざわざこの家までやって来て、玄関先で何でももうすぐテレビが映らなくなるから買えとかいう話をし始めたのだった。

テレビはまだ映る。

買って二十年から経つが、ちゃんと映る。

他にもない、田中電気で買ったテレビだ。慥か、衛星放送が始まったとか始まるとか、そんな時期に買い替えたのだ、立派なテレビに。

思い出した。

慥かその時先代の田中電気は——。

映るようになるんです——。

と、言ったのではなかったか。

そう。その時、徳一は衛星放送など観ないから安い方が良いと言って、店主お勧めの機種を退けたのだ。衛星を使って何をどれだけ綺麗に映すのかは知らぬけれども、これ以上画像が綺麗になったところで嬉しくも何ともない。モノクロがカラーになった時は驚いたけれども、それ以上はどうしようもないと思う。縦よこんば立体になるとか言われても、結構ですと言うよりない。あれこれ飛び出されても困る。こちらに向けて鉄砲でも撃たれたりしたら、驚いてショック死するかもしれないではないか。

大体徳一はそれ程テレビを観ないのである。

そう言う先代は、別に今衛星放送を映す必要はないのだと力説した。要は機械が対応しているかどうかなのだと言うのである。衛星放送対応型テレビを入れておけば、後はアンテナを立てるだけ、いざとなればアンテナだけで映るようになるんだから、どうせ買い替えるなら対応型にしておいた方が良くないかという話だったと思う。弁が立つ親爺だった。能く覚え

ている。
いづれ――。

いづれ普通の放送が廃止されるようなことがあったとしてもその時はアンテナ一本で即対応だと親爺は言った。アンテナさえ立てれば映るようになるんだから対応型さえ買ってあげばそれでいい、今は映らなくなつていい――二十何年前、あの親爺はそう言って徳一に今のテレビを売りつけたのだ。

いづれはあたしにアンテナ立てさせてくださいよ――。

そんなことを言ったと思う。だから徳一は購入時、衛星放送だかのアンテナは立てなかったのである。その後、衛星放送でない普通の放送は廃止されることなく現在に至っている訳で、つまり徳一の部屋のテレビは、衛星放送対応型ではあるのだけれど、今も衛星放送は映らない。アンテナがないからである。謂わば宝の持ち腐れの代物である。



七十二年
六箇月と
一日

いずれその日が来たならば、田中電気にアンテナを立てて貰おうと、ずっとそう思っていたのだが。通常の放送が廃止される前に親爺が廃止してしまったのだが。

その、親爺の念願、だったろう衛星放送のアンテナも立てぬうちに、その息子がやって来て何もかも映らなくなるから買い替えろなどと嚇す（おびせ）というのはどうなのか。

いったいどういう了（りょうけん）見なのだあいつ。

お前の親父さんから買ったテレビは立派で丈夫でまだまだ映る、映らなくなったって衛星放送対応型だからアンテナを立てればいいのだと、徳一は威張って言ってやったのだ。

すると田中電気は、まあ衛星は衛星なんだろうけれども、電波がどうの地上がどうの、デジタル時計がどうのと、要領を得ない御託（ごたく）ばかり並べたのである。

どうしても映らなくしたいらしい。

まあお前さんがそれだけ言うのなら映らなくなるのかもしれないが、NHKが映ればそれでいいと答えた。実際、徳一は民放を殆ど（ほとん）観ないのだ。そう言うと、それも映りませんよなどと吐（ぬ）かす。あまりにも横暴な言い様なので、金を払っていて映らぬ道理はないと言って追いついたのである。

まったく以（もつ）てなっていない。

あれでは先代が泣く。田中電気の看板が泣く。

NHKは公共放送だ。映らなくなる訳がない。何たって公共なのだから。それに、徳一はちゃんと受信料を払い込んでいるのだから。

ずっと払い続けているのだから。

最初にテレビを買ったのは、何十年前になるだろう。

実家を出て独り暮らしを始めた後であることは、まず間違いないだろう。思うに、徳一は独立してわりとすぐにテレビを買ったのではなかったか。いや、学生時代はラジオばかり聴いていたのだから、就職してから買ったのだったか。当時は高価な品だったから、いずれ中古品を買ったのだと思うが。

どうであれ――。

テレビを買ってからこっち、徳一は毎月毎月きちんきちんと数十年、律義にNHKの受信料を払い続けているのである。観なくたって払っている。義務だと思っっているから苦にはならない。

まあ集金人が来ていた頃は、留守だったり手持ちの現金がなかったりしたこともあっただろうし、何箇月分か纏めて払ったことまも幾度かはあったと記憶しているが、十年くら前に銀行引き落としに切り替えたから、それ以降はより確実にきちんきちんと支払っている筈だ。滞納のしようがない。

七十二年
六箇月と
一日



世間には信念を以て受信料の支払いを拒否しているという人達もいるらしいけれど、それはそれである。徳一には拒否するだけの確固たる理由が見つけれられない。ならば支払うべきなのだ、徳一は信じる。

決まりは守る、それが徳一的美徳なのである。

きちんと決まりを守ってさえいれば、必ずきちんとした扱いをして貰える筈だと、徳一はそう信じてもいる。きちんとするのが一番だ。きちんとしているのだから、映らなくなることなどない。断じてない。こんなに真面目に受信料を払っている人間の許に公共の放送局が電波を送らないなどという理不尽はない。そんな非道が罷り通る訳がないではないか。

困ったなあ困ったなあと田中電気は言ったが、何が困るのか解らなかつた。田中電気が困ろうが潰れようが、知ったことではない。田中電気に対して徳一は何の負い目もないのだ。

先代から立派なテレビを買ってやったし、それから十五年くらい前に冷蔵庫も買ってやった。トースターも買った。餅が焦げつかないとかいう新型の奴を買ったのだ。それから年に幾度か蛍光灯も買っている。電池だつて買う。

スーパーで買わずにわざわざ田中電気で買っているのだ。

徳一は田中電気の立派な客なのである。お得意様と言ってもいいだろう。得意客なのだから感謝されて然るべきなのである。何故に困られなければならぬのか。

田中電気は頻りに困った困った繰り返し、また来ると言って帰った。

今度来る時は電球のひとつも持って来いと言ってやった。便所の電球が半分黒くなっているのである。あんなに黒く変色しているのだから、そう長くは保つまい。二十年以上蛍光灯を買いつけているのだから電球一個くらいくれてもいいだろう。

——あの電球は。

今日にも切れてしまうのではないだろうか。

暗くなつてから切れたりすると換えるのも難儀になるし、夜中に切れたりするともつと嫌だ。真夜中に便所に起きて、その最中に切れたりしたら大ごとである。だから、起きたらすぐにチェックしなくてはいけないと徳一は考える。もう、とつくに起きているのだが。

——いや。

そうではなくて。便所の電球は取り敢えずいいのだ。

問題は別にある。電球の寿命を心配している暇はない。

そう、田中電気がやって来たのが三日前のことなのだ。慥かその日はポストの前までしか行っていない。だから徳一は、無意識のうちに三日前を候補から外していたのであろう。

すると——。

——田中電気の前か後か、ということだな。



徳一は何か推理でもしているような気になる。

こうやって理詰めで絞り込んで行けば自ずと解答は得られるのだ。それが理性的な在り方というものだろう、などと思ったりする。

しかし、推理などするまでもなく徳一は解答を知っている筈なのであって、推理しなければ自分の体験さえ確定出来ないなどという状況自体がそもそもナンセンスなのであるが、その辺りのことは完全に柵に上げられている。

——田中電気は。

いいヒントだったと徳一は思う。

あの丸顔の、商売が下手な田中電気の二代目が帰った後。

慥か——テレビを観た。そう、徳一は珍しくテレビを観たのではなかったか。別に観たくもなかったのだが、映らないと言われたので癪に障って無理に観たのだと思う。普段はまるで観ない。天気予報も観ない。ニュースさえ観ない。

いや、社会に興味がない訳ではない。政治にだって世界情勢にだって徳一は一家言持っている。問われれば諸問題に就いて自説を滔々と述べる用意もある。徳一は社会の動向に対して十二分に関心を持っているのだ。

でも、だからといってためにテレビを観る必要などない。新聞があるからいいのだ。

世の中のことをそんなに速く知る必要などない。

朝になれば判ることを急いで前夜に知ったところで、どうにもならぬではないか。知ったところで知った後には寝るだけなのだ。眠ってしまえば考えられぬ。寝て起きたら忘れてしまっているかもしれぬ。

だが、流石さすがに朝刊で読んだことならその日一日は確しかり覚えている。夜になるまであれこれ思案することも出来る。社会の出来ごとを自分なりに咀嚼そしゃくして理解し、自分なりの見識を持つとうとするのなら、朝刊を念入りに読む方がずっといい。

——朝刊を取って来ないとな。

そんなことを、ふと思う。

だが、今は朝刊どころではないのだ。まずは、推理せねばなるまい。社会のことはその後だ。

——テレビは何を観たのだったか。

まるで覚えがない。

でも、ちゃんと映った。何が映らないだ失礼など、徳一は独りごちたのではなかったか。

ならば、観たのだ。

でも、覚えがない。



七十二年
六箇月と
一日

まあ、どうせ見覚えのないタレントが出て意味の解らないことを喚き乍らごしやごしや騒いでいただけだったのだらう。最近のテレビは皆そうだ。内容はまるで判らぬが見た目は全部一緒だ。ドラマか映画でもやっていたのならもう少しは覚えていた筈だ。徳一は刑事ドラマなどは好きで能く観ていたのだ。

最近は、あまりやらない。

——待てよ。

漸く、徳一は身体を起こした。

寒くもない筈なのに、すうとした。

寝汗をかいているのだ。生きている証拠だ。

そろそろこの寝巻きは暑いんだろうなと思う。寝巻きと呼んでいるのだが、要はスウェットである。年寄りがパジャマというのも何処か変だし、今更浴衣いまさらゆかたで寝る者も少ないのだろうと思ひ、徳一は六年ばかり前からこの恰好で寝ることにしているのである。これならば不意の来客があつても、そう困ることはない筈だしたたという、強かな計算もあつた。

不意の来客があつたことなど一度もないのだが。

いや、備えあれば憂うれいなしである。例えば、今ここに宅配便の配達員が来たとしたってすぐに対応出来るというものである。恥はずかしくはない。

立ち上がる。

ゆっくりと腰を伸ばす。

あくまでもゆっくりと、である。

そこでまたゆっくりとしゃがみ、布団の端を掴む。

これはもう、慣例的行動なのである。動作が脳を経由せずに連鎖的に起こる。身体だけで動いているのだ。踊り慣れたダンスを舞うが如き、脊髄反射的な動作といえるだろう。

掴んだら自動的に畳む。

——待て。

布団を畳む動作に移行する直前に、徳一はしかし、いやいやこれでは駄目だと思い直したのだった。もしこのまま布団を畳んでしまったら、徳一はそれを押し入れにしまい、続いて顔を洗って着替えてカーテンを開けて朝食の支度をしてしまうことだろう。

それは違うのだ。

今は、推理の時間なのである。

徳一は、慎重に一步一步を踏み締めつつも部屋の隅まで進むと、丁寧に畳んで積んである新聞紙の山の前に正座した。

ここに——。



昨日や一昨日やその前が、順番に積まれているではないか。

きちんとしていて良かったと徳一は改めて思う。

毎日毎日、読み終わったらきちんと畳む。そしてきちんと積み上げ、月に一度紐ひもできちんと縛しばって、決められた日にきちんと玄関先に出す。

近所の子供会が毎月一度、町内の古紙回収をしているのである。

徳一も地域住民の一員として、子供達のそうした立派な活動には是が非でも協力せねばならぬと考えている。リサイクルがどうの、ボランティアがどうのという小難しい問題は置いておくとしても、頑がん是ぜない子供等らが一所懸命に——或あるいは嫌々なのかもしれないけれども、まあそれでも欠かさずに行っていることなのであるから、地域にしがみついて暮らさせて戴いていけるような徳一なんぞに出来ることがあるのであれば、何を横にどけてもするべきだと思うからである。

出しておけば、持って行ってくれる。

それだけのことなのだが。いや、それでも大いに助かっているのである。古新聞というヤツは、それはもう、どんどん溜まるものなのだ。高だか一月分でも、束ねれば持つのが難儀な程の重さになる。半年も溜めてしまったら恐ろしいことになる。

考えるのも嫌だ。

それに、最近ではあのちり紙交換車というのが廻って来ないのである。新聞を購読する家庭が減ったのか、はたまたああい種別の業態が商売として成り立たなくなってしまったのか、その辺の事情は判らないのだけれども、めっきり来なくなった。

そもそもちり紙という言葉を耳にしない。まあ、拡声器からは毎度お馴染みちり紙交換などというアナウンスが流れていたが、そう言ってい乍ら換えてくれるのは前々からロールのトイレットペーパーだった訳で、ちり紙などというものは、ここ三十年くらい徳一も目にしたことがないのだけれど。

——昔は。

便所の隅にこんな感じでちり紙が置いてあったよなと、徳一は積んである新聞を見つつ思う。そして一番上の新聞を取り、日付を確認する。

これが、昨日の新聞である。絶対に間違いない。

昨日は何ごともなかった。それは確実だ。つまり昨日ではないから、これは除外する。一日でもない。夕刊もあるから間違えぬように除けて、三日前の新聞を手取る。総理大臣の支持率が下がったとかいう見出しが目に入った。覚えがある。

——ちゃんと読んでいるじゃないか。

そう思う。



七十二年
六箇月と
一日

しかもちゃんと覚えていた。大したものだ。

裏返してテレビ欄を眺める。字が小さい。

——これは眼鏡だ。

老眼鏡は独り暮らしの必需品である。

徳一はずっと眼が良いのが自慢だった。近視でも乱視でもなかった。だから、ものが良く見えないという状態がどのようなものであるのか、かなり長い期間理解することが出来ずにいたのである。

それだけに、最初に老眼が出た時はショックだった。何故見えない、眼病か、もしかや死ぬのかと案じたものだ。

でも——。

まあ眼鏡を掛ければ見えたのだから、それでいいと思った。

すぐに慣れた。別に恥ずかしいとも思わなかった。

そういうものだと思っただけだ。

老眼を意識したのは四十五歳くらいの時だったろうか。老眼鏡を眼鏡屋で眺めたのは、それから三年後だったと思う。四十八の誕生日に自分で買ったのだ。

——そういうことは覚えていたな。

能く覚えてゐる。駅前の眼鏡屋だ。慥か貴金属なんかも扱っている。笹山眼鏡店とかいう店だった。あの店はもう随分前に潰れてしまったのだと記憶している。慥か夜逃げしたんだっ
たか。そうだったかもしれない。今使っている眼鏡は、メガネなんとかという横文字の賺した店で誂えたものだ。

——ああ。

あの店にはお爺さんがいたよな、と徳一は思い出す。

ずらりと並んだ眼鏡の中にお爺さんが座っていたのを覚えている。いや、二十四年前、四十八歳の時の自分がそう思ったのだ。膝の上には孫を乗せていた。可愛らしい子供だった。孫はあの頃四つか五つぐらいだったから、今はもう三十近いのだろうか。

一家は夜逃げしてしまつた訳だが。

あの、笹山眼鏡店の店主は、その時幾歳だったのだろうか。たぶん、今の自分よりはずっと若かつた筈だ。まだ六十前だったのじゃないだろうか。なら、今の徳一より十歳以上若い。そんな働き盛りを捕まえて、徳一はお爺さんと評していたのだろうか。それは随分じゃないか。と、いうよりも、今の自分の方が余程お爺さんじゃないか。いやいや。

——オジいサン、だ。

だから眼も悪いのだ。



眼鏡は寝る前に外して、必ず台所のテーブルの上に置く。

枕元に置いておいたりすると、誤って踏んでしまう可能性があるからである。新聞や書簡しょかんは必ずテーブルの上で読むことにしているから、それでいいのだ。

眼鏡を取りに行くため腰を浮かせて、でも徳一はそこで思い留まった。眼鏡なんかを欲する以前に、この部屋は少しばかり暗いのである。光量が足りないのだ。

ならば、先ずは。

——カーテンを開けるべきなのか。

もうすっかり明るくなっているのだし、こうして起きてもいるのだから、カーテンは開けるべきだろう。

——よし。

カーテンを開けようと思い立ち、徳一は再び思い留まった。

まだカーテンには早い。通常は、先ず顔を洗い、然しかる後に着替えをしてからカーテンなのだ。往來おうらいを通る人に姿を見られる可能性を考慮するに、その順番は譲れない。

まあ、そのためのスウェットなのだ。スウェットなのだから見られてもいいとも思うのだが。備えているから憂えることはない筈はずなのだけれども。

でも、まだカーテンを開ける気運きうんは満ちていない。

徳一は立ち上がった。紐を引き、電灯を点けた。ぼんくらな電灯は夕方と同じように明滅して、それから弱々しく発光した。

どうやっても陽光に敵うものではない。部屋の中は益々胡散臭い色合いになった。

電灯が完全に点いたことを確認し、さて眼鏡を取りに台所へ行こうか——とも思ったのだが、そこでやや気が逸った。同時に台所へ行くのが面倒に感じられた。

億劫の発動である。

——億劫だ。

このままでも読めるかもしれない。読んでみて駄目だったならその時に取りに行けば良いのだ。いずれにしてもやってみるだけの価値はある。

徳一は電灯の真下に立ち、新聞を光源に近付けるようにして眼を細め、無理矢理に活字を追った。

番組名を確認する。

さっぱり判らない。

読めないこともない。ないのだけれど、読む気がしない。断片的に読み取れる文字の連なりが、意味を成していない。

日本語か、と思う。



番組名を見てもどんな番組だか判らないし、出演者の名前を見ても誰が誰なんだかさっぱり判らない。片仮名と横文字とエクスクラメーションマークが躍おどっている。こんな暗号のよ
うな文字列をどれだけ眺めていたって、三日前の記憶は取り戻せはしないだろう。

たった三日前なのに、である。田中電気の困った顔は在り在りと思ひ出せるのに。と、い
うか二十四年前の笹山眼鏡店の店主の顔の方が余程明確に思ひ出せる。

そんなにお爺さんじゃないな、あの店主は。

でも、頭からお爺さんだと思っていたのだ。徳一は。そう考えてみると何だか理不尽な感
じがしないでもない。

それにしたって——。

——駄目だ。この新聞はいかん。

やはりこんなものに頼ってはいけけないのだろう。

こうやってすぐに外部記憶に頼るから脳が弱るのである。記憶力が衰えるのだ。自分で考
えて、自分で自分の頭の中を探って、そして思ひ出さなければいけないのだ。そうでなくて
は意味がないのだ。田中電気という有力なヒントがごく自然に見つかったように、手掛かり
は必ず己の頭の中にある。勿論答えもある。そしてそれは、己の力で見出すことが出来る筈
のものである。

徳一は新聞を下ろし、見慣れた部屋をぐるりと見渡した。

古惚ふるぼけた部屋である。見事なまでに老人の住まいだ。

四十年前に抽選あで中あたった公団アパートだ。

その頃のことでも能く覚えていて。お前が申し込んだって独身には中たらないぞと皆に言われて、それが中たったものだから徳一は小躍りして喜んだのだ。

こんなハイカラな——その当時、既にハイカラなんぞという言葉は使っていないかったのだけれど——まあ当時にしてはモダンな——それも使っていないかったのだが——とにかく、そうした、わりに良い感じの部屋に安く住めることになった訳であるから、薄給だった徳一は素直に喜んだのである。

引越しには同僚の手を借りた。家財は少なかつたからあつという間に終わった。これならお前一人でも出来ただろうと言ったのは、去年喉頭癌こうとうがんで死んだ同期の桜井さくらいであったと思しう。

実際何もなかったのだ。

一階なのでカーテンを買うまで不用心で仕様がなかった。

目の前は公園で、入居した当時は植え込みがなくて樹木も今より背が低くて、ずっと見通しが良かった。



あの窓辺の箆筒も最初はなかった。

一時は、何とかというジッパーで開け閉めするタイプのビニールの衣裳ケースを置いていた。でも三年で壊れた。ああいうものは今もまだ売っているのだろうか。

それから、今と違って電話も高価だった。保証金と工事費用と回線使用料だか何だかを取られたと思う。どんな内訳だったか覚えてはいないのだけれども、六万か七万はぶん取られた筈だ。それに電話機も支給される奴だったと思う。勿論ダイヤル式だ。最初に設置されたのは、所謂黒電話だった。

今は留守番機能付きのテレフォンである。これも、慥か田中電気で買ったのではなかったか。いや、確実に田中電気だ。

——やはり上客じゃないか。

絶対そう思う。越した当時を持っていたテレビはモノクロのやけに小さい奴で、室内アンテナでザラザラした画しか映らなかった。中古だったから仕方がない。その後カラーテレビに買い替えて、それがカラーなのに緑一色の不可思議な画面になってしまい、それで今のテレビを買ったのだ。

いや買わされたのだ。衛星放送対応型を。

一昨年脳卒中で死んだ田中電気の先代に。

あの親爺は配線やら何やらもしてくれた。
まだ良く映る。

この間だつてちゃんと――。

「ああ、温泉だ」

温泉が映っていた。見覚えのない若い女性タレントと、昔時代劇で悪役ばかりやっていた俳優が、混浴でもないのに一緒に風呂に浸かっていたじゃないか――。

徳一はもう一度テレビ欄を顔の前に掲げて、眼を凝らした。

三日前。

田中電気が帰ったのはたぶん六時過ぎ、その後の時間帯だから、六時半か、七時か――。
のんびり湯の旅スペシャルという番組が見つかった。七時からである。

これだ。これだよ。

番組名に続いてサブタイトルらしきものも記されていた。秋田・秩父・徳島・列島縦断秘湯名湯美味いもの巡り――と書いてある。そういえばあの悪役俳優は舟盛りの刺し身をもぐもぐ喰っていたのではなかったか。海のない秩父の旅館で。

そうそうそう。

行つたのだ。徳一はこの時映つた秩父の鉱泉に行ったことがあつたのだ。



七十二年
六箇月と
一日

あれはもう三十年くらい前だったかな。何で行ったんだったかな。高校の同窓の茂田しげたと山井おかじまと、もう一人くらいいたよなあ後は誰だっけ——。

三日前に思ったじゃないか。

決まりだ。田中電気は三日前だ。

で——。

徳一は再度新聞の前に座り、今度は四日前の新聞を抜き出して、徐おもむろに広ひろげた。

地デジ普及率予想をはるかに下回る——という見出しが目めに留とどまった。

ちでじ、なのか。

じでじ、なのか。

地で地、という洒落しゃれなのか。

それならそれは、いったい何のことなのか。

地デジという方式の何かが一齐に施行されるといふ話だけは徳一も知っている。だが、それがどのようなもので、どのような階層がその方式を採用せねばならぬのか、その結果どうなるのかに就いて徳一は今ひとつ把握はあく出来ていない。というか、まるで解とっていない。

しかし今更誰かに尋たづねくのも躊躇ためらわれた。

尋くは一時の恥尋かぬは一生の恥などと謂う。それは真理だと思ふ。しかしものごとには普くタイミングというものがある。この話が最初に新聞に載ったのは、もう何年も前のことだと記憶している。その時に尋いていれば、まあ問題はなかったろう。だが、既に尋けるタイミングは逸しているだろうと思ふ。この期に及んで問ひ質すのは、やはり気が引けてしまふ。一時の恥が、どうも一生付き纏いそうな気がしてしまふ訳である。

それ以前に、尋く相手が身の周りにいないのだけだ。

それこそ、まあいざれ電氣的な話ではあるのだから、田中電氣辺りが教えてくれても良さそうなものだと思ふ。それが二十年以上に亘り蛍光灯や電池を買い続けている優良顧客に対する礼儀だろうと思ふ。それなのに。

売りつけようとするだけだ。その手に乗るか。

——田中電氣め。

恩知らずである。

親爺が築き上げた身代も、あの二代目でお終いだ。

まだまだ小僧なのだ。徳一がテレビを買った時、あの男は中学生か何かだった筈だ。丸顔に面砲をくっ付けて、詰襟かなんか着ていたのじゃなかったか。態だけは一人前になったけれど中身は変わっていないのじゃないか。だから店を継いでも所帯も持てないのだ。



何がもう映らなくなるだ。

——おや。

徳一はぼうと考える。

田中電気の先代は、自分より十近くは齡上だった。すると二十年前にテレビを買った時点で六十過ぎくらいだった筈だ。冷蔵庫を買った十五年前には、確実に六十を越していただろう。

でも、田中電気の先代は親爺だ。死ぬまでオヤジさん、と呼んでいたように思う。

何故だろう。

笹山眼鏡の店主は最初からお爺さんだった。徳一はお爺さんと決めて疑わなかった。でも二十四年前、眼鏡屋は六十前だったのだ。ならば十五年前、六十を過ぎた田中電気は優にお爺さんの筈じゃないのか。何故に眼鏡屋はオジイさんで電気屋はオヤジさんなのだ。自分の基準は何処に据えられているのだ。

見た目か。

——いいや。

そんなことはない。

笹山眼鏡は、白髪交じりではあったが中々品の良い、ナイスミドル的な風貌だった。

背は低かったが男前だったし、肌にも艶つやがあった。記憶の中の笹山眼鏡は現在の徳一などよりずっと若々しい。一方田中電気は、二十年前の段階で概ねまる禿はげだったのだ。しかも猫背で、慥たか痛風だった筈だ。蟹かにが好物だったのだ。だからという訳ではないけれど、動きも年寄り臭かった。確実に老けていた。見た目でいうなら電気屋の方がずっと老人だったろう。見た目勝負なら眼鏡屋の庄勝だと思う。

まあ潰れて夜逃げしてしまったのだが。

まだ生きているかな笹山眼鏡。

田中電気は死んでしまった。

二代目は、何だか頼りなくて商売が下手だ。大体、ジデジだかチデジだか判らないような年寄りに、そういうことを易しく教えてくれる、そうした親切心から地域密着型の商売というのは始まるのじゃないか。こちらが教えを乞こう前に、知らないだろうと察せよ。尋きにくいじゃないか。

だから今以てまるで解らないのだ。

解らないから、徳一は地デジ関係の記事だけは概ね読み飛ばしてしまうのだ。解らないのに恰好つけて読んでみても意味がない。自分自身に知ったか振りをして見せたって始まらないからだ。つまり、この記事は読んでいない。読んでいないが。



——この日は。

そうだが買い物に行ったぞ。

買い物は水曜日に行く。徳一は一週間分纏めて食材を調達するのだ。四日前は——。

日付の横の曜日を確認する。

案の定、四日前は水曜日だった。

買い物は近所のスーパーにしか行かない。スーパーにも電球や蛍光灯くらいは売っているのだが、徳一は義理堅く電化製品だけは田中電気で買うようにしている。そう。だから徳一はスーパーで便所の電球を買わなかったのだ。もう、黒くなっているというのに。ちゃんと売っていたというのに。田中電気に情けを懸けて買わずに帰ったのである。だからこそ、翌日ひよこひよこやって来てテレビを買えなどと言う二代目を邪険に扱ってしまったのではなかったか。

——スーパーみよし屋。

徳一は記憶を掘り起こす。

そうだ。徳一はみよし屋には大体四時過ぎに行く。あの日は蒲鉾を買った。それからキャベツだ。インスタントラーメンの五個入りのパックと、筆ペンを買ったんじゃないか。

——買ったよ。

川田かわたの息子が佃煮つくねを送ってくれたので礼状を書こうと思ひ立ち、筆記具がボールペンしかないことに思ひ至って、それで筆ペンを購入したのだ。礼状はその日のうちに書いて、翌日の午前中に出そうと思ひてうっかり忘れ、午後になって思ひ出して、やおら出しに行こうと思ひ立って支度しているとところに田中電氣が来たのだ。まったく間の悪い電氣屋だ。

——ようし。

スラスラ思ひ出せる。

氣持ちが良い程スムーズに記憶が甦る。そう、みよし屋ではニンジンも買った。たんざくに切つてラーメンに入れたのだから間違ひない。野菜を入れるなら塩ラーメンにすべきだと反省したじゃないか。

蒲鉾とキャベツとニンジンとラーメンと筆ペンと——それからイチゴも買った。

そして、葉書だ。

葉書がなくちゃ話にならない。

佃煮のお礼で封書はないだろう。ここは葉書だろう。

川田の息子はわりと氣の良い男だが、軽薄な性質で、凡そ封書を貴たつとぶようなタイプではない。畏まった手紙なんか貰つたところで却つて迷惑がるような男だ。でも、気軽に電話を掛ける程に親密な間柄でもないのだ。電話などしたら徳一の方が畏まってしまふ。



川田の息子は川田の子供なのであって、徳一の子供ではない。徳一には子供がいないから扱いに慣れていないというのものもある。照れてしまうのだ。電話するとしても父親の方にすだろう。だからまあ、ここは葉書だと、そう思ったのだ。しかしみよし屋は葉書を取り扱っていない。だから――。

葉書を買いに郵便局まで行ったじゃないか。行った。

郵便局はみよし屋の反対方向にあるから結構距離がある。実際かなり歩いて、それで徳一は疲れてしまったのではなかったか。

疲れて、その、うちの目の前の、窓から見えるその公園の端っこのベンチで――。

――オジいサン。

「間違いないな」

どうやら記憶が連結している。

そう呼ばれたのは四日前だ。四日前に決定してしまってもいいだろう。

呼ばれた場所は、公園だ。その、カーテンを開ければ見える公園の、あの端っこのベンチこそが――現場だ。

声は。

記憶の中で再生される声は大人のものではない。

と、いうより明らかに子供のそれである。女性ではない。やはり子供だと思う。では。

自分はどうして子供なんかと話をしたのだろう。

子供に用事はない。いいや、子供以外にも用事はない。徳一はたぶん、誰にも用事なんか
ない。向こうから関わって来ない限りは、何も起きない。ただ、徳一に用がある者もまたい
ないのだ。だから、昨日も一昨日も口を利いていない。田中電気を追い返した時の罵言が、
今のところ最後の発言だ。

電球くらい持って来い、とか言ったのだ。

もし徳一が今ここで死んだなら、最後の発言は電球くらい持って来い、になってしまふ。

——持って来るかなあ。

あの二代目はまだ三十二三だろうか。そうすると随分遅い子供ということになる。そうい
えば先代が死んだ時は享年八十一とか言っていたかな。なら五十を過ぎてから出来た子供
なんだ、あいつは。

己の子供というのは。

——どんな感じなのだろう。



まあ——最近の若者は、とうにか子供は、自分の両親をジジイババアと呼んだりもするらしい。いや、自分より齡上はみなジジイかババアなのだそうだ。小学生は中学生を、中学生は高校生を、ジジイババア呼ばわりするという。ならば、徳一などはもう筋金入りのジジイなのだろう。そもそも、しんせい真正の老人なのである。そう呼ばれたところで気にする方がおかしい。

いや、本当に気にしていた訳ではないのだが。

四日の間完全に忘れていたのだから、絶対に気にしていた訳ではないと思う。そもそもこれだけ色々と思い巡らせていて猶なほ、そう言われたその瞬間の状況を思い出せないでいるのであるから、これはもう、まるで気に懸けてなどいかなかったと考えるべきだろう。

爺がジジイ呼ばわりされただけなのだ。

これで例えば、徳一が五十代だったとかいうのなら、多少は傷付いたりしたのかもしれないのだけれど——。

——傷付く、なあ。

いや。自分はその程度のことでは傷付く程にナイーヴな人間ではないだろう。徳一の能く知る徳一は、もっと凶太くて鈍感な男だ。そもそも徳一自身が六十前の笹山眼鏡をお爺さんだと決めつけていたくらいなのだから。何を今更という感じではないか。馬鹿馬鹿しい。

そう思いつつ、徳一は新聞を再び畳み直して、日付順にきちんと重ねた。

「おじいさん」

口に出して言ってみる。ちょっと違う。

やはり、片仮名だ。しかし、何故カタカナだと思ふのだろうか。耳で聞いただけなのに。

「オジーサン」

でもない。い、の辺りが、もっと柔らかいのだ。ジイさん、でもない。じいさん、でもない。

そこで徳一は気づいた。

ジイではないのだ。お爺さん、なのだ。それは決して汚い言葉ではない。寧ろ丁寧な呼び方だ。

別に馬鹿にされた訳ではないのである。罵られた訳でもないし、蔑まれた訳でもない。不良や何かにクソジイと誦られた訳ではないのだ。そういう類いのものではなくて――。

――ああ。

そう、可愛らしい声だったのだ。

乳臭いというか、幼いというか。

子供も子供、あれはたぶん小学生になりたてか、まだ未就学児か、そのくらいの、とても小さな子じゃなかっただろうか。



耳の奥で記憶が再生された。

丁度、目覚めた時のように。

——オジいサン。

そこで。

徳一の脳裡に、在り在りとビジュアルが浮かんだ。田中電気の間抜け面などより余程明瞭にそれは浮かんだ。

浮かんだのは五六歳の小さな男の子の顔であった。取り分け可愛らしいとか、賢そうだとか、そういう感じではない。でも腕白そうだとか大人びているとか、そういう印象もない。

子供子供した、ただの子供だ。

四日前。

一息吐いた徳一が、さて暗くなる前に戻ろうかとベンチから重い身体をようやく起こした、丁度その時。

背中の斜め後ろからその声は聞こえた。

振り向くと子供がいた。

子供はベンチの座面を指差していた。

小さい指のその先には、郵便局で買った葉書があった。

その子供子供した子供は、徳一に忘れ物を知らせてくれたのである。その、

——オジいサン。

のひと言で。

徳一は、たぶんおおとかああとか言つて前屈まえがみになり、その葉書を手に取つたのだ。手に取つたのを見届けて、子供は何処かにすつ飛んで行つてしまつたのだ。きつとあの子は、ベンチの後ろ側で何かして、徳一が立ち上がるのと同時に横に廻つたのだらう。そして座面に残された葉書を見つて、知らせてくれたのだ。

——そうなんだ。

お礼も言わなかつたなと徳一は思った。だから意識下で気にしてゐたのだらうか。
小さい子供の動きは素早く、老人である徳一の動きは緩慢かんまんであり、行方ゆくえを見定めることさへ儘ままならなかつたくらいだから、とてもとても追いかけることなどは出来なかつたのだらうが。

それでも恙つつがなく礼状が書けたのはあの子供のお蔭なのだ。

——そうだよ。

そういうえはあの佃煮はどうしただらう。全部食べてしまつたのだつたか。食べかけだったか。なら冷蔵庫だらう。残つていたら朝飯のおかずにしよう。折角の贈り物なのだし。



漸く、徳一に朝が来た。

それまで意識的に見ないようにしていた時計を見る。

まだ、六時五分だった。

長い。一分が長い。一時間が長い。それなのに一日は短い。

すぐに陽が暮れる。一年はあっという間に過ぎ去ってしまうというのに、四日前の出来ごとがまるで何年も前のことのようにである。昔のことは能く思い出せるのに。近くが霞み、遠くが明瞭なのだ。

——心も老眼なのだ。

老人はみんなこうなのかと思う。

そして、のろりと徳一は立ち上がる。全部思い出せたんだから、さぞやすつきりしただろうと、そんな風に考える。でも。

何か、違う気がする。

これこそ齢の所為なのかと思う。布団の処まで戻り、押し入れを開けて、そこで徳一は立ち止まる。やっぱり何か忘れている——気がする。

忘れているというよりも判らないのか。判らないというより意識が届かないような部分があるのだろう、自分の、奥の奥の方に。

それは、テレビ番組のことも秩父の鉱泉のことも佃煮の礼状のこともないし、地デジも総理大臣も関係がない。笹山眼鏡とも田中電気ともきつと関係がない。ないだろう。

皮膚の表面ではなくて、身体の奥の方が痒いような感じである。角質化した踵の痒みとうか。搔いても搔いても痒みには届かないとうか。隔靴搔痒より質が悪いとうか。

押し入れに布かれた古新聞を眺め、徳一は再度思案した。

「オジイサン」

ああ、こんなイントネーションだ。

——そうか。

お爺さんという呼称は老人を指し示すだけのものではないではないか。クソジイやなんかと違って悪口雑言の意味合いはないだろう。その代わりに、おじいさん、には——。

お祖父さん、という意味もあるのだ。

——それだ。

連れ合いもいない、子供もいない、そんな徳一には、当然乍ら孫はいない。

子供もいないのに孫がいる訳もないのだ。だから徳一は、自分は老人だという自覚は十二分にあったのだけれど、自分がおじいさんだという自覚は、まったくなかったのである。

だから。違和感があったんだ。



七十二年
六箇月と
一日

独身のまま七十二になってしまった徳一は、誰の祖父でもない。

誰の祖父にもなり得ない。

このままだったら生きてきたところで、死ぬまで、生涯おじいさんと呼ばれることはない。ない——筈だった。

だから。

「オジいサン」

徳一はもう一度あの子供を真似て声を発した。

イントネーションは似ていたけれど、あの子の声はこんな嗚れた濁声じゃなかったな。

ずっと独りで生きて来て、これまで淋しいと感じたこともなかったし、それはこれからもないと思うし、別に不便も不安もないのだけれど、赤ん坊を抱いたことすらないというのはやっぱり少し淋しいと思うべきなのだろうか。

他人の孫は能く見るけれど。

羨ましいと思つたことはただの一度もなかったのだが。

徳一は、てきぱきと布団を上げると、顔を洗ってきちんと着替え、朝飯の支度をする前にカーテンを開けて、まるで我が家の庭のように見慣れた公園を、古びた窓から見渡した。

まだ、子供達の姿はない。

老婆が犬に引かれてひよこひよこ歩いているだけだ。

年寄りには朝が早くて困るよなと、そんなことを思う。

それから――。

今日は田中電気まで出向いて便所の電球を買ってやろうと心に決めて、徳一はゆるゆると台所に向かった。



七十二年
六箇月と
一日